

氏名（本籍）	フクダ マキコ 福田 槇子（鹿児島県）
学位の種類	博士（国際文化学）
学位記番号	甲 国第3号
学位授与年月日	平成26年3月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
論文題目	『バガヴァッド・ギーター』の倫理思想 —索引方式による研究—
論文審査委員	主査 外菌幸一 教授 副査 戦 慶勝 教授 副査 佐々木 亘 教授（鹿児島純心女子短期大学）

内容の要旨

福田槇子氏（女性）は論文3点（いずれも査読有）を公表し、1回の学会報告を行っている。この博士学位論文は、これらの研究業績を踏まえて作成されている。本論文は基準字数（8万字）をはるかに上回る23万字以上の字数で書かれており、非常に大部なものとなっている。

本論文は、『マハーバーラタ（Mahābhārata）』第6巻に属する『バガヴァッド・ギーター（Bhagavad-Gītā）』（以下 BhG と略す）全18章の内容を、『マハーバーラタ』哲学編に見出される倫理の立場から検討したものである。ダルマ（dharma；法）の一語で言い表されるインドの思想は、哲学、倫理、宗教という学問の分野に分けて捉えることはできない。このような状況にあるインドの倫理思想について、先行の研究では「人の行為の規範に関する思想」「客観的には『指導原理』『規範』、主観的には『履むべき道』」として考察されている。本論文もこれに則って論述されている。

BhG は「マハーバーラタの縮図」と称され、それ自体多くの思想の集成である。この BhG において、その主題となっているのは何かを明らかにすることが本論文の一つの課題となっている。すなわち、この主題となるものに焦点を当てて、検討の対象および検討の視点を、直接 BhG から引き出すことが試みられている。そして BhG が、倫理的行為と宗教的境地との融合統一を主題としていることが示される。行為には、さまざまな状況が想定されるが、それらの状況下において人が保持すべき心の在り方、及び行為の在り方が BhG の教説の中心となっているのであり、そのために BhG は、宗教的・哲学的観点から

のみならず、倫理的観点からも重要な価値を有するものと考えられる。

本論文の全体的構成は次のとおりである。

序論

第1章 『バガヴァッド・ギーター』のインド文献における位置

第2章 叙事詩『マハーバーラタ』の概要

第3章 『バガヴァッド・ギーター』

第4章 各論に向けて ―考察の方法、『マハーバーラタ』の倫理思想の特徴、

検討の視点、検討の対象―

各論

第1章 哲理

第2章 実修

第3章 行為

第4章 祭祀、苦行、布施

第5章 敬信

むすび

『マハーバーラタ』の倫理については、O.Strauss が「活動主義、厭世観、退嬰主義、活動と退嬰の関係、調停、世襲階級の問題」の六項のもとに論じているが、金倉圓照はこれを「現実肯定の倫理、厭世主義、現実否定の倫理、調和の立場」の四項にまとめて、日本に初めてマハーバーラタの倫理を紹介した（金倉「インドの倫理」）。

この中の「現実肯定の倫理」について「pravṛtti」の語の用例を中心に検討したのが、中村了昭「大叙事詩の解脱法品にあらわれる行動主義の倫理」である。その特徴を示す用例を本論文では「行為肯定の立場」と称している。また同じく中村了昭「叙事詩にあらわれる行為否定の倫理」では、「現実否定の倫理」について「nivṛtti」「tyāga」「nirveda」の語の用例検討によって明らかにしているが、その特徴を示す用例を本論文では「行為否定の立場」と称している。これらは『マハーバーラタ』第12巻「解脱法品」における用例を取り挙げたものである。

以上の二つの立場の特徴を併せ持つ「調和の立場（第三の立場）」を最も明示するのが BhG であるが、以上のような『マハーバーラタ』の倫理の立場から BhG を検討した研究事例は本論文が初出である。BhG を倫理的観点から取り挙げている論文は散見されるが、これらはいずれも BhG の一部の用例を取り挙げるのみで、BhG 全体にわたる倫理思想の考察を行った研究は未だになされているとは言い難い。

本論文では、考察対象となる言葉について、テキスト中の使用例を索引によって網羅し、その内容を分類して検討する方法を用いており、この方法を「索引方式」と自称している。使用している索引は、中村了昭（編）「バガヴァッド・ギーター総索引」である。索引方式

では、検討する項目に確実に関係する用例を効率よく集め、これを客観的な証拠材料として提示することができるという利点がある。本論文では、検討項目に確実に関係する用例（第一次検討項目）をまず分類し、その分類においてさらに検討すべきであると判断した重要項目（第二次検討項目）の用例についても索引から引き出して検討対象としている。

BhG の「倫理」（行為の規範）を検討する視点は、「karman（行為）」とその関係語が表れる用例を検討して明らかとなる視点をを用いるべきであるという理由から、先行研究の『マハーバーラタ』の倫理の特徴もふまえ、次のような視点が設けられている。

- (1) BhG において実行が求められる行為の内容とは何か。
- (2) 行為の在り方として、行為に従事してもなお消えることのない行為否定の立場の精神と言えるものとは何か。
- (3) BhG が第三の立場に立つものなら、行為肯定の立場の行為内容を実行しても、行為否定の立場で到達する解脱などの境地が得られるものと考えられる。BhG の行為によって到達する境地とは何か。

以上、「行為の内容」「行為の在り方」「行為によって到達する境地」が本研究の検討の視点とされる。このうち「行為の在り方」に関しては、「行為において何を捨て、何に安立せよと述べられているのか」を明らかにすることが重要である。そこで、「執著」「欲望」「怒り」などの、人が行為において捨て去るべきものを「厭離の観念」とし、また「平等観」のような、行為において安立すべきものを「平静の観念」とし、これらの二観念によって「行為の在り方」の特徴が導き出されている。

実践を重んじるインド思想では、理想の境地は単なる概念ではなく、努力の結果、実際にそこに至ることができるものとなっている。そして、ある境地への到達を説く文脈には、大抵その境地に至るための方法（行為、行法）が併せて述べられるという特徴がある。また、BhG で説かれるあらゆる実践は、BhG の教説の主「至尊（Bhagavat）」に結び付くという特徴がある。そこで本論文では、Bhagavat（至尊が自身を指すときは「われ」と一人称で表れている）への到達に関する方法を、各論で考察する検討の対象（考察主題）としている。そのような意味での「Bhagavat に関する用例」は、次のように分類されている。

- (1) 「われ（mad-）に到達する」
- (2) 「われの状態（mad-bhāva）に到達する」
- (3) 「その他の境地への到達」

これらは、いずれも「至尊」（Bhagavat）に到達する方法を導き出すための用例であり、その分析を通じて、〈哲理〉〈実修〉〈行為〉〈祭祀・苦行・布施〉〈敬信〉の五項目が検討の対象として選出されている。これらの項目を導き出した用例は、各章の問題の所在として取り挙げられている。以上が序論の概要である。

次に「各論」（いわゆる「本論部分」）では第一次検討項目の分類がなされ、章末のまとめでさらに詳細な分類が試みられている。各論で論じられている各章の内容は、順に次の

通りである。

「第1章 哲理」では、サーンキヤ哲学について説かれている BhG 第2章第11偈～第30偈、及び【サーンキヤ (sā-khya)】、【プルシャ (puruṣa)】【プラクリティ (prakṛti)】、【田 (kṣetra) と知田 (kṣetrājña)】が第一次検討項目とされている。この中で、「二元」つまり「精神原理プルシャ」と「物質原理プラクリティ」とを統轄する「最高者」(至尊、ブラフマン) についての用例が見出されるという。この最高者は万物の創造、維持、帰滅を行う存在である。

行為否定の立場の理想は、「業果を生ずることによって精神(個我)を輪廻に束縛するもの」から去ることである。個我を束縛するのは、プラクリティを構成する三つのグナ(サットヴァ、ラジャス、タマス)である。そこで【グナ (guṇa)】【サットヴァ (sattva)】【ラジャス (rajas)】【タマス (tamas)】の用例が検討されている。例えばサットヴァは、楽と知への執著により個我を束縛する。ラジャスは激情を本性とし渴愛と執著により個我を束縛する。タマスは無知から生じ、個我に迷妄をもたらし、放逸・怠惰・眠気によって個我を束縛する。厭離の対象として最も重要なのは、このようなグナに起因する作用である。

この他、【個我 (dehin, śarīrin)】の用例が第二次検討項目として検討され、個我が物質原理による束縛を受けて、厭離を必要とする状態となっていないかが確認されている。個我は無知に覆われているが、この無知が減せられるならば「不退転」(解脱)に至るという。

「個我はグナなきが故に、行為することなく汚されない」のであり、個我は「肉体より生じる三グナを超越して、生・死・老・苦より解脱し、不死を享受する」という。また、「あらゆる行為は一切においてプラクリティのグナによってなされる」のであるが、他方でアートマンは「行為者ではない」とされ、「無作なる存在」とされている。

「第2章 実修」では、【ヨーガ (yoga)】とその関係語の用例が第一次検討項目とされている。そして、「正しい心統一法」に現れる諸原理(諸諦)である【感官 (indriya)】【意 (manas)】【知性 (buddhi)】【アートマン (ātman)】を用いた行法によって到達する境地が「心統一によって到達する境地」における用例提示の規準とされている。到達する境地としては、「智慧 (prajñā)、思慮 (dhī)、知性 (buddhi)、知 (jñāna) の確立」「清浄心」「不退転・解脱」「苦との結合を断つ」「平等観」「ブラフマンへの到達」「至尊への到達」さらにブラフマン(梵)の境地に関して「梵涅槃」が見出されるという。この他「最高の完成」「われ(至尊)に内在する最高の涅槃である寂静」などが見出される。

検討の視点から分析すると、「行為の内容」は「ヨーガ(心統一)」である。ヨーガは「行為の束縛を断つ」ための方法であり、ヨーガの目的とは「アートマンを清めること」である。「ヨーガによって行為を厭離した者」を「行為は束縛しない」とされるので、行為否定の立場に立つものであることがわかる。

ヨーガにおける厭離および平静の観念は、次の二つに分類されている。

- ①心統一の行法のみ、厭離・平静の観念が見出される用例

②心統一を前提とする行為に、厭離・平静の観念が見出される用例

「第3章 行為」では、【行為 (karman)】とその関係語及び【i-gate (i-g)】【carati (car)】【vartate (v-t)】とその関係語の用例が第一次検討項目とされている。「行為の在り方」において「グナを超越する者は、苦・楽、土石・黄金を平等視し、尊敬と軽視、敵と友を同一とする」とあるように、「相対的事象の厭離」が見出される。そこで第二次検討項目として【相対 (dvandva)】の用例の確認がなされている。

以上の用例の検討から、次の結論が得られている。「行為肯定の立場」と「行為否定の立場」では、行為の内容と行為によって到達する境地が異なる。第三の立場では、行為の内容は行為肯定の立場と共通するが、行為の在り方と行為によって到達する境地は、行為否定の立場と共通する。

「行為肯定の立場」における「行為の内容」としては、「祭祀、苦行、布施」及び「各種姓の行為」が挙げられる。各種姓の行為は「本性に優勢なグナによって配分されている」という。これによって到達する境地は「天界」のみである。しかし、義務を果たさない場合は「罪悪を得る」とされる。

「行為否定の立場」における「行為の内容」は、「心統一の行法」であり、到達する境地は上記の通り（「智慧 (prajñā)、思慮 (dhī)、知性 (buddhi)、知 (jñāna) の確立」等）である。

第三の立場では行為の実行を説くが、到達する境地は行為否定の立場で得る境地であり、ここにも厭離および平静の観念が見出される。

また、至尊も行為をなす存在となっている。その行為（万物創造、維持）にも厭離および平静の観念が見出される。「中立者の如く坐す」という至尊の行為における態度は、グナを超越した者の特徴を述べる用例にも見出される。

検討の視点による分類は次の通りである。

- ①特定の行為を指し、厭離・平静の観念が見出されない用例
- ②特定の行為を指し、厭離・平静の観念が見出される用例
- ③特定の行為を指さず、厭離・平静の観念が見出される用例
- ④特定の行為を指さず、平静の観念のみが見出される用例

これらの用例の検討から、行為肯定の立場の用例にも「優柔不断」「臆病」「卑しき心の弱さ」「恐れ震えること」などが厭離の観念として見出される。もともと、これらはグナ的作用として見出された厭離の観念とは多少の相違がある。しかし、このように見出される以上、厭離の観念の有無が、行為の立場を判別する決定的な視点とはならないと言える。決定的な視点となるのは、行為によって到達する境地である。第三の立場は、「行為の内容」と「行為の在り方」という視点からは、「行為の行為肯定の立場」か「行為否定の立場」かを判別することが難しいが、「行為によって到達する境地」の違いによって判別することができる。

「第4章 祭祀、苦行、布施」では、【祭祀 (yajña)、苦行 (tapas)、布施 (dāna)】とその関係語の用例が第一次検討項目とされている。祭祀、苦行、布施の三つあるいはこの中の二つが合わせて述べられる用例は、15例を数えこれらの行為がいかに重視されていたかが分かる。個々の項目では、いずれも行為の在り方に関する用例が見出される。また、祭祀の用例が非常に多い。行為に関しては「行為はブラフマンから生じるものと知るべし」とされ、祭祀が行為より生じると「知る」認識によっても「解脱する」とあるように、祭祀と行為はブラフマンに密接に関係している。また、祭祀、苦行、布施に確固であることは、真・善 (sat) であり、信仰なく実行されるなら、それは虚偽 (asat) と見なされている。信仰の有無が、善と偽善とを分かち重要な指標となっている。

検討の視点を用いた分類は次の通りである。

①祭祀、苦行、布施の行為において、厭離の観念が見出される用例

②祭祀、苦行、布施の行為において、厭離・平静の観念が見出されない用例

③祭祀、苦行、布施の行為において、平静の観念のみが見出される用例

①で到達する境地は、「最高にして本初の境地」である。②について、行為の束縛を断つことが行為否定の立場では求められるが、「祭祀のために行動する者にとって、すべての行為は消滅する」という。また、祭祀の残り物である甘露 (amṛta) を食べることで「永遠のブラフマンに赴く」という。③で到達する境地は、「われに到達する」及び「ブラフマン」への到達が見出される。①、②、③いずれも第三の立場にあると言える。祭祀、苦行における厭離なき者について説く用例も見出される。

「第5章 敬信」では、【敬信 (bhakti)】とその関係語が第一次検討項目とされている。また、第二次検討項目として「敬信の在り方」において【常に心統一する (nitya-yukta)】の用例が確認されている。また、「至尊に親近する敬信者」と「不滅にして未顕現なるものへの親近者」とでは、「どちらがヨーガを知る者であるのか」との問いがあることから、【不滅 (akāra)】【未顕現 (avyakta)】の用例が確認されている。「敬信者」では、【信仰 (śraddhā)】の用例が確認されている。また、至尊にとって親愛なる者について【親愛 (priya)】の用例が確認され、最後に、至尊の恩恵によって到達する境地が【恩恵 (prasāda)】の用例によって確認されている。

敬信の対象は「至尊」を挙げる例が多い。人がそれぞれ別の神格を信奉するのは、自己のプラクリティによる制限を受けることが原因となっている。至尊は各自の信仰を「不動となす」。信仰は「各人の本質に相応」し、「その人のもつ信仰、それが実にその人である」とされ、信仰がその人の人間性を表すものとなっている。

敬信の用例では行為を明示するものはわずか（心統一、祭祀、至尊を敬信する者のあらゆる行為）であり、行為の在り方において厭離および平静の観念について説く用例は少ないことが指摘されている。また、敬信の用例は、心統一の行法とともに説かれる用例が多

く、敬信のみによって到達する境地を説く用例もある。そのため、次のように分類されている。

- ①敬信と心統一とが関連して到達する境地を説く用例
- ②敬信のみによって到達する境地を説く用例
- ③敬信の行為において厭離・平静の観念が見出される用例

①で到達する境地としては、「無上の境界であるわれに安立する」という。②では「永遠の寂靜に達する」という。③では「どのように行動しても、われの中で行動している」「われに到達する」と説かれている。これらの用例から、敬信を持って行われる行為は、常に平静の観念に立脚した行為となると言える。

また、①、②、③のいずれにも「厭離の観念」はほとんど見出されない。敬信の用例において、厭離・平静の観念は、「敬信を得る」「最高の敬信を得る」こと、また「至尊にとって親愛なる者」の用例において見出される。このことから、敬信を得た者とは、既に厭離を達成している者となっていると考えられる。「至尊への到達」にも厭離の観念が見出されなかったこともその一証左となる。よって、BhGの説く敬信は、厭離の観念として見出される確固たる倫理的基盤が背景にあるものと結論できる。

本論文の「むすび」では、検討された全体の用例に基づき、行為に関する厭離・平静の観念が一括して提示されている。まず、厭離の観念において、「厭離すべき対象となっているもの」には次のようなものが挙げられている。

「(行為の) 果報 (karma-phala)」「無作 (akarman)」「執著 (sa-ga)」「執著 (sakta)」「願望 (āśīr)」「一切の所有 (sarva-parigraha)」「相対 (dva-dva)」「羨望 (vimatsara)」「我執 (aha-kāra)」「迷妄 (moha)」「我欲 (mama)」「不平 (asūya)」「愛著・憎悪 (rāga-dveṣa)」「一切の欲望 (kāmaṅ sarvān)」「渴望 (sp-ḥa)」「疑惑 (saṁśaya)」「依存すること (āśraya)」「愛著・恐怖・怒り (rāga-bhaya-krodha)」「恐怖をもたらすこと (udvega-kara)」「一切万物への敵意 (vaira-sarva-bhūte-ḥa)」

この中で、重複しているものほど厭離が強調されている対象である。行為における厭離が重要であるのは、厭離の対象が一切の行為を生じさせるプラクリティの三つのグナに起因するものとなっているからである。

平静の観念は、厭離の観念の用例に比して数が少なく、次のようなものが挙げられている。

- ①「平等観 (samatva, sama)」「一如観 (ekatva)」「知性 (buddhi) に汚れなきこと」「清浄心 (prasāda)」などの「知性の確立」
- ②「われに一切の行為を捧げる」「われに集中する」「われに依止する」「われへ心を開ける」「自己の行為によって尊敬する」という「至尊への依止」
- ③「ブラフマンにすべての行為を捧げる」「ブラフマンという行為の三昧に住する」という「ブラフマンへの依止」

これら平静の観念は「第2章 実修」で心統一によって到達する境地として見出されるものであることがわかる。そのため、平静の観念に安立しない者とは、心統一なき者であることになる。

最後に、本論文の考察から得られた重要な知見として、次の2点が特筆されている。

- (1) 最高神である至尊の行為には厭離および平静の観念が見出され、第三の立場を示している。
- (2) 敬信を得るまでには厭離の観念は見出されるが、敬信によって到達する境地を説く用例に厭離の観念は見出されない。

審査結果の要旨

1. 評価

本論文は、インド叙事詩『マハーバーラタ』中の一詩編にして、ヒンドゥー教の聖典として著名なバガヴァッド・ギーターの倫理思想を、緻密な文献研究に基づき体系的・総合的に考察したものである。「索引方式」という独特な手法により重要な用語に関連する部分を漏れなく検討することを可能にしており、それによってバガヴァッド・ギーターの中心思想の骨格がきわめて論理的かつ構造的に解明されている。また、サンスクリット原文を自ら逐語的に和訳しており、既刊の翻訳業績に追随することなく新たに立論しようとする姿勢には、研究への真摯な基本姿勢がうかがわれる。なお、論文全体の字数は28万字を超えており、非常に大部となっている。

本論文は「序論」と「各論」（「本論」に相当する）の二部構成となっており、序論においては、研究史を主内容として、マハーバーラタおよびバガヴァッド・ギーターの概要と倫理思想の特徴とが整理されている。また、序論第4章では、各論で展開される考察方法の概要が、「検討の視点」と「検討の対象」を幾つかの重要項目に整理することによって明示されている。

各論においては、「至尊（バガヴァッド）」つまり「神・神の境地・神の至福」（解脱）の境地に到達する方法として「哲理」「実修」「行為」「祭祀・苦行・布施」「敬信」の五項目を採りあげ、順次、索引方式を用いて詳述している。また、倫理思想を考察する視点として「行為の内容」「行為の在り方」「行為によって到達する境地」を挙げ、特に「行為の在り方」について、行為によって離れるべき対象を「厭離」、行為において安立すべき境地を「平静」として、両観念が「行為肯定の立場」「行為否定の立場」「調和の立場」のそれぞれにどのような構造で表れるかを検討している。

『マハーバーラタ』の倫理は、大きく「行為肯定の立場」「行為否定の立場」「調和の立

場」に分けられるが、本論文はバガヴァッド・ギーターに見られる「調和の立場」の構造に注目し、各立場における「行為の内容」「行為の在り方」「行為によって到達する境地」の違いを分析することによって、調和の立場が、前二者の弁証法的統一をなしていることを明らかにしている。つまり、「行為肯定の立場」と「行為否定の立場」とでは、行為の内容と行為によって到達する境地が異なるが、第三の「調和の立場」では、行為の内容は「行為肯定の立場」と共通し、行為の在り方と行為によって到達する境地は「行為否定の立場」と共通するという。この指摘は、倫理（道徳的行為の実行）と宗教（道徳の超越）との融合統一にヒントを与える一つの重要な結論であると言える。

また、バガヴァッド・ギーターの「哲理」においては、サーンキヤ哲学に基づき「一切の行為はプラクリティ（根本原質）のグナによってなされる」と説かれており、グナに起因する執著・欲望・怒りなどを厭離すべきであるとされる。この場合、第三の立場が「行為を実行しても行為否定の立場で到達する境地を得る」のは「グナの作用を離れて行為するからだ」とする本論文の考察は、バガヴァッド・ギーターにおける最高の倫理的立場が、インド哲学正統派のサーンキヤ哲学の理論に基づくことを示す重要な指摘である。

さらに、本論全体の考察から、従来の研究では見逃されていた次の二点が重要な結論として得られている。(1)最高神である至尊の行為には厭離および平静の観念が見出され、第三の立場を示していること。(2)至尊への「敬信」(バクティ)は、厭離を達成した心境で現れるものとなっていること。これらの結論は、バガヴァッド・ギーターに説かれる三解脱道としての①ジュニャーナ・ヨーガ(知道)、②カルマ・ヨーガ(行道)、③バクティ・ヨーガ(信道)が、相互にどのように関連しているかについて、重要な示唆を与えるものである。

2. 残された課題

本研究は、「行為の内容」「行為の在り方」「行為によって到達する境地」の三視点のもとに総合的に論述されている。しかし、各視点について論じるべきことはまだ残されている。例えば、「行為の内容」については、「行為が行われる状況下」を念頭におくべきであるが、それについてはいっそう精密な分析が求められる。「行為の在り方」では、行為によって離れるべき対象を「厭離」の観念、行為によって到達する境地を「平静」の観念として取り出し詳細に検討している。しかし、これらの二観念以外の徳目（「理知」「正直」「忍耐」など）については検討されておらず、それら他の徳目についての検討が今後の課題となる。また、『マハーバーラタ』だけでなく『ラーマーヤナ』も含めたインド二大叙事詩の倫理・道徳の全体的検討を行うべく考察範囲を拡大することも望まれる。

3. 結論

以上、本論文は、ヒンドゥー教聖典として著名なバガヴァッド・ギーターの倫理思想を、

緻密な文献研究に基づき体系的・総合的に考察したものである。研究方法として「索引方式」という独特な手法を用いることにより、従来には見られなかった緻密さで倫理思想の構造を明らかにしている。これによってバガヴァッド・ギーターの中心思想の骨格がきわめて論理的かつ構造的に解明されていることは高く評価される。また、サンスクリット原文を自ら逐語的に和訳しており、博士後期課程に進学してから始めたサンスクリット語の学修が短期間のうちに高い読解能力の体得にまで達していることも、称賛されるべき努力の成果と言える。

また著者は、今後の研究課題に対しても明確な見通しを持つとともに、旺盛で熱心な研究態度と文献史料の収集・読解・分析に高い能力を有している。それ故、自立して研究できる基礎的能力を十分に具えているだけでなく、研究者として飛躍的に成長する可能性を秘めている。